

(元仙台市建設局長)

先生は明治45(1912)年7月京都帝国大学工学部を卒業後、直に台湾総督府に就職されたが、大正12年4月東京市に変えられ、爾来昭和14年6月まで在任せられた。その間下水道課長、土木局技師長、上下両局長などを歴任せられた。大正12年の東京大震災復興に偉大なる貢献された事は云うまでもなく、又東京オリンピック給水対策に参画されるなど、全国的に下水道の大家として敬称されていた。下水については著書も残されております。ただ私が昭和21年5月より戦災復興事業の担当者であった時、仙台市の助役に就任されましたので、その時に先生よりうけた肝銘事項を申し述べます。

昭和21年7月頃、ご就任早々と思いますが、ゴミ焼却場が入札されるばかりになっておりました。しかし現地を視られた結果、現在は市街地より4キロメートル位離れているが、やがて人口が増加すれば人家が接近することになるからと、これを強引に風下に移転させた事です。当時は人口25万人位でしたが、今は70万人をこえていますから先見の明というべきでしょう。次は河水汚濁の防止です。仙台市は、東京・大阪に次いで日本で三番目に下水道が中央部に敷設された都市ですが、合流式であったから市内を貫流する広瀬川、梅田川の流水は人口の増加と共に殊の外汚れがひどくなつたのです。が、先生

は、仙台市内より8糠も離れた所に潤滑式なが大浄化槽を計画し、これに直径4.1メートル下水管を結んで、旧管を切り替え、見ちがえるようにきれいにした。2年後には鮎が上がって来るようになった。第3は、5000坪の公園のことです。復興計画では公園の中に国道を貫通させて直線にすることとしたが、先生は市内の国道は曲げてもいいからそのまま公園を活かせと言って曲ったままの国道にした。変則的な交叉であり、事故もおき易いが、都市の縁に対する執念はこうでなければならぬと思った。尚復興事業に街路の変更は付きものであるが、そのため東北電力と電話局との関係者と移転補償について協議しておる処に先生が入って来て、この際電柱を無くしてはどうかと提案された。突然の事ではあったが、私は、杜の都の再現の責任を負っているので50~30メートルの広幅員の街だけでもと言って賛成した。それがもとでケヤキ並木の大樹林帯が出来、無電柱街路として建設大臣から表彰される基となつたのである。

